現状・課題

環境

- 気候変動
- 地球温暖化
- 異常気象
- 東京が屋久島のようになる
- フードロス もったいない
- 空家を活用したシステムがあると良い
- 私たちを取り巻く環境 →課題の複雑化
- 人間の活動が、環境に及ぼす影響
- 環境の問題は幅広くて一括りにできない
- 生物多様性
- ペットの放棄
- 外来種
- 公害
- 汚染
- 持続可能・・・武蔵野市だけではない
- 環境に良いことは自分が必要だからする ・震災→太陽光発電 ・生ごみ対策→ミミズ飼育
- 環境への投資
- ごみを資源として活用 ごみ＝宝
- 海のごみ →マイクロプラスチック →鳥・魚への影響

私たち

- 環境のことを、知っているようで、知らない
- 基礎的なことでも知識の共有が難しい
- 継続が難しい
- 子どもは親を見ている 親が行動するとマネをする
- 全部を教えると考えなくなる
- ふだん環境に関心のない企業人でも、子どもや孫に影響があることは深刻に受け止める
- お年寄りへの啓発は難しいが、屋上菜園は驚きと感動を与えている
- 情報を発信しても伝わらない
- 小中学校の時の環境教育は大人になっても覚えている
- 一方で、小中学校の現場でESDはなかなか浸透していないのが現状、難しい

全体的な視点

- ■施設・周辺整備協議会3つの視点 ・低炭素モデル ・コミュニティ ・まちづくり
- 成功事例のないモデル機能
- お金を誰にどう出してもらう施設？
- 環境のことを考えられる人になってほしい
- 全体のミクロマクロの視点
- 自分の行動が温暖化に結びついていることを知ることが大切
- 30年後の市民に向けて何をする施設？
- 日常的な行動と温暖化の結びつきを知る
- 集客・指標・費用対効果を踏まえた市民の望む施設とは？
- 旧クリーンセンターや運営協議会へのリスペクト
- 低炭素化の実現とエコプラザの役割
- まちの中に環境を考える場を点在させる →まち全体の拠点化
- 持続性
- 必要性
- きっかけをエコプラザでつかめると良い
- 課題の複雑化に対応したメタボリズム、成長し続ける、完成しない積み重ね
- 実体験・体感から気付き、共感、行動、活動へ
- 誰のため？なんのため？ どのような満足につながるの？
- どんな市民になってほしい？ 何を学び、考える？
- 新しい価値を共につくり、共有する

運営

メタボリズム

- メタボリズムの考え方
- 新しい価値をつくったり共有する場
- ガイドラインを設けない受け止め方
- 時代とともに価値観が変化していく
- 学びを次から次へと考えて行く展開
- 価値の一元化の追求 ＝環境問題が語れなくなる
- なぜ？が次のステップにつながる Sense of Wonder

市民参加

- クリーンセンターの歴史 ＝武蔵野市の市民参加
- この地域外の方にも 興味を持ってもらうためには…
- まち全体を拠点に
- 住民参加型の啓発機関
- 地域を育てる
- 市民参加の土壌
- 学び合う関係づくりの場
- 若年層や子どもの 参加を方寄せない
- おもしろがる人たちをつくる
- 市民への説明責任

機能

情報収集・発信

- 伝達
- 産官学の役割分担による情報発信
- 広報誌の発行
- WEB、SNSの利用
- 定性・定量の見える化
- 人の集まる場所でのPR・警鐘
- ごみのことから、生活環境全般のことを考え、発信・交流する
- 環境の本質を発信・伝達することで意識を変容
- 身近な生活環境のことを発信する施設
- プロセスを伝える
- 環境に関する情報を伝達して意識を変えたい

展示

- 見える化
- データで見せる
- 日常的な行動と 温暖化との結びつきを知ること
- 運営協議会の活動の歴史は、世界に誇れる ＝ クリーンセンターの今を支えている ←蓄積のコンテンツは重要
- 負（マイナス）のイメージの活用
- 自然の実態の見える化
- 誰でも楽しいと思う教育・学び、得する事が必要

活動

- 情報発信する場所 →人手の問題 →活動の輪を広げる
- 子どもの言葉で大人を動かす
- コミュニティ活動 ＝環境活動
- 共感から行動へ
- 行動できる場
- 地域分散の活動 ＝アウトリーチ
- 勉強会
- 環境教育のリーダー育成
- ESDの地域活動への引用
- モヤモヤ会議から、地域活動の水平展開

学び

- 感じる力・観察する力→考える力に
- お年寄りの学び直し
- 主体的な学び、学び方を学ぶ
- 「学ぶ」より「調べる」、「研究する」
- 経験の機会、学ぶきっかけ
- プロセス学習
- なぜ？を問う
- 学びの質を高める
- 店舗等での実験
- イベントと学びの中間
- 自然環境体験
- 出口から入り口までのジャーニーを考える
- 知ることの大切さ
- 楽しみながら学べる場 ＋ブレスト＝気づきの場
- 体験から気づきを得て共有する
- 複雑系の学びができると面白い
- 環境教育は子ども中心が良い、大人は無理？
- 子どもたちの環境教育への支援
- 子どもへの負の教育
- 武蔵野市として「eラーニング」 今の学校教育、自由研究・・・持続し知識を拡散する
- 食品ロスに対する大切さ、意味 3～5～10年マイルストーンを市民とつくる
- ‘食べる’を通じた「環境食育」のモデル化、フードロス／もったいない
- 見えないものを想像させる　下水・空気
- 油を水に流した場合、自然に戻すには、どれくらいの水が必要か

交流

- コミュニティ活動 ＝環境のための活動 ＝ESDへの広がり
- 共感力
- 人と人をつなげる
- 環境学習会の拡大 エコプラザ＋企業や公共施設で体験と参加と対話を増やす
- リタイヤしたOB・OGを生かす 働く場・コミュニケーションの場 新しい仲間を広げる
- コミュニケーションの循環
- 外国人とのコミュニケーション
- 学び合う関係づくりの場
- いつでも相談できる場、聞く耳を持つ人
- 世話をやく人
- 人材を発掘する場

連携

- 企業とどう協働し、何をするか
- 地域のスペシャリストを核とした展開
- 学校教育との連携、地域の理解、協力
- 様々な施設等との連携
- 地域分散の活動→地域住民の覚醒
- 運営協議会と市とのパートナーシップの継続

どんな

- 危機感のアピール
- 遊びながら学ぶルーズさも必要
- 成功事例のない、モデル機能を持つ
- 教育目的→強迫観念　窮屈にならないように
- 楽しく、おもしろい
- 見ているのに気が付かないモノやコトに焦点をあてる
- ポジティブな環境問題とネガティブな環境問題
- 守りたいもの＝土と緑とコミュニティ
- 節約する気持ち（心理的効果）
- おしゃれ
- 関心のためのストーリー
- 感じる力、観察する力を考える力に
- 量ではない、本当の成果にこだわった啓発
- 「どっちがいいの？」といった、本質的なことをわかりやすく発信する
- 伝統の継承
- 武蔵野市流のSDGsをつくる
- 興味の温度差を解消する
- ごみから広く環境へ
- 体験を積ませてデータなどを示しながら、次のステップへと展開していく手法

施設整備

メタボリズム

- 収蔵しない
- 奥まで見えないところが良い、先が気になる造り
- 設計者のこだわり →運営側に伝わらない →どう伝えるか

空間活用

- 屋上菜園
- 見る・見られる関係と、つながる空間性